

大阪ワークショップ

大阪市天王寺動物園（2003年3月11-12日）

検証プログラム

「動物解説パネルを作ろう」

『新しい教育プログラム』p.80（2001年度 日本動物園水族館協会 教育推進事業報告書）

http://www.jazga.or.jp/new_kyouiku_p/teian/sougou_04.html（日動水 web サイト内）

日程

2003年3月11日（火）

10:00-10:20	受付
10:20-10:30	オリエンテーション 園長あいさつ スタッフ紹介
10:30-10:45	班名決定の儀式
10:45-11:45	ワークショップの内容について 趣旨説明 伝えたいことをまとめる 思いをパネルにするためには
11:45-14:00	動物解説パネル制作のための観察と調査
14:00-17:00	動物解説パネル制作
17:00-	懇親会

2003年3月12日（水）

9:30-9:40	集合・パネル仕上げ
9:40-11:10	動物解説パネルの設置 来園者の反応調査
11:10-11:40	反応調査のまとめ
11:40-12:30	昼食
12:30-14:30	動物解説パネル作成意図と調査結果の発表 ディスカッション
14:30-14:50	天王寺動物園の展示構想について
14:40-15:00	閉会にあたって

概要

参加者自身が計画から調査・設計・制作・展示・評価までを行う解説パネル制作プログラムに、園館職員、教員、一般市民が共同で取り組むことで、日頃の思いや問題意識を交換すると同時に、このプログラム自体の普及を目指すWS。

1日目に導入、事前調査を行い、実際にパネルを制作した。

2日目は作成したパネルを展示し、その評価、発表、ディスカッションを行った。

導入

WS参加者約50人（園館関係者約20人、教育関係者3人、一般市民約25人）を9つのグループに分け、自己紹介から始まり、園長だったらやってみたいことや、伝えたいことを話し合い、発表した。動物の行動を伝えたい、生息地について知って欲しい、自然保護について理解を深めて欲しいなど、様々なことが発表された。アイズブレイクの内容や手法の検討が不十分だったものの、参加者の様々な思いを引き出すことができた。

その後のセミナーでは、計画から調査・設計・制作・展示・評価というパネル制作の筋道を確認した。どのようにして自分の思いを解説パネルに表現していくかというプロセスについて理解を深めた。

また、国内外の様々なパネルの事例紹介を行った。単に文章だけが並んでいるものや、イラストなどをふんだんに使うもの、パネルを利用した者の行動を引き出すような工夫など、その特徴や効果について知識を広めた。

パネル作成

グループ毎に設置場所の下見を行った。活動場所は動物園内の一角（レッサーパンダ、オオ



WS参加者受付の様子



解説パネルで伝えたいことを話し合う



伝えたいことの発表



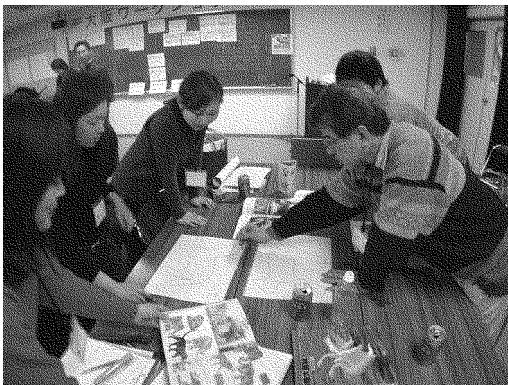
思いを具体化するための手法を学ぶ



まずは現行のパネルをチェック



お客さんの様子も観察しながら話し合う



さっそく設計図を書く



図鑑で調べたり、職員に質問したり

カミ、ハイエナ、トラ、ライオン、ネコ科動物、猛禽類、バーバリーシープ)に限定した。現行の動物解説パネルについてその場で議論し、来園者がそのパネルをどのように利用しているかの調査を行った。

まずはどの展示に関するパネルを制作するかを決定し、パネル制作の計画を立てた。対象動物の選定、パネルを設置する場所、解説する内容、思いを伝えたい相手、解説の手法、評価の方法などを話し合い、計画書を作成した。

その計画書に従い、あらかじめ用意されていた様々な道具や材料を利用して、WS参加者が実際にパネル制作を行った。わからないことは図鑑やインターネットで検索したり、職員に質問したりして調べた。また、デジタルカメラやスキャナなどの機器も活用された。解説パネルのサイズは、台紙としてA0サイズのスチロールパネル2枚を支給し、その範囲内という規定を設けた。

異なる立場の参加者が話し合い工夫していくことで、ディスカッションからモノを作っていくことの重要性を実感することができたであろう。

パネル展示・利用調査

完成したパネルを、実際に動物の前に展示した。制作されたパネルには以下のようなものがあった。

- ・レッサーパンダの特徴を身近なモノで解説
- ・オオカミの生態解説
- ・ハイエナの頭骨と機能の解説
- ・ハイエナの体の機能などを解説
- ・ライオンは怖いのか
- ・トラとライオンとヒトの擬態
- ・ネコ科動物の体の特徴
- ・猛禽類と自分の大きさ比べ
- ・バーバリーシープのオスをさがす

めくるとクイズの答えが書いてある、模型をさわってみるなどハンズ・オンの手法を取り入れた

ものが多かった。

単に展示するだけではなく、一般来園者がそのパネルをどのように利用しているかを、行動調査や発話調査などを通して観察し、パネルが持つ効果を測定した。また、他のグループが制作したパネルの見学も行った。

1~2 時間程度の展示・観察を行い、パネルを取り外した。その後、グループ毎に利用状況調査の結果を分析し、反省点や改善方法などを話し合った。

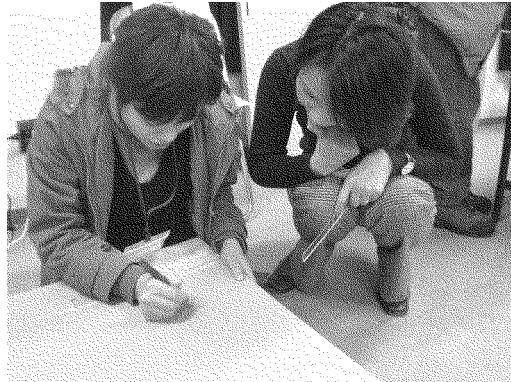
評価と報告会

報告会では、グループ毎に、まず自分達が制作した動物解説パネルは、誰を対象に、どのようなことを伝えたかったか、どのような工夫をしたかなどを報告した。

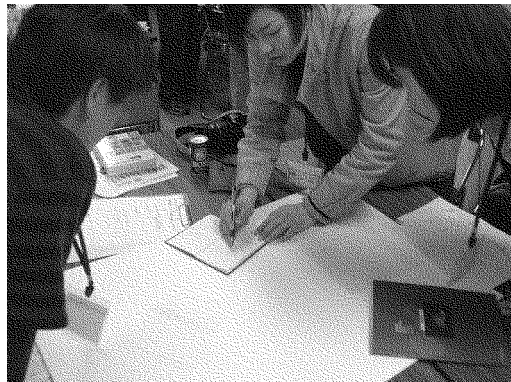
「現行の展示では十分に解説されていない点を補助的に解説しようとした」「一般的に理解されている動物のイメージを変えたかった」「子どもを引率する幼稚園の先生をターゲットとした」など、グループそれぞれに特徴的なねらいがあった。

同時に、来園者の利用状況調査の結果も報告された。「パネルの前を通過した来園者のうち何人がパネルを利用した」「制作したパネルが、多少なりとも一般来園者の新しい興味を引き出すことができたことを確認できた」「自分の思いと来園者の求めているもののずれを感じることができた」「展示する場所が悪かったため思うように利用されなかった」など、様々な報告がなされた。

WS 参加者は、評価することを意識しながらパネルを設計・制作し、実際に評価することで、課題を見つめその改善案を考えることの重要性を理解することができただろう。



話し合いながら少しずつ形に



自然と熱が入る



ずいぶん完成に近づいた



机ではおさまりきらず、



完成したパネルを持っていざ展示へ



どうやって固定するかも重要な問題



利用者の様子を観察する



利用してくれるだろうか？

ディスカッション

各グループの報告をもとに、利用者のニーズを知ることとそれを探ることの難しさ、子どもの興味と発達要求、擬人化という手法の持つ意味、動物を見てもらうためのきっかけを作ることの重要性などについて議論された。

また、トピックスとして天王寺動物園での実際の展示を作るときの工夫や、教育担当者の思いなどをご報告いただいた。

「発言者が多少偏ってしまった」「このプログラムを実際に園館で実施することについてまで話が及ばなかった」などの反省点はあるものの、議論に比較的十分な時間を取ることができ、ある程度視点を絞って様々な意見を交わすことができたことは非常に有意義であった。

まとめ～開発プログラム実践～

展示を観察し利用者のニーズや評価方法までを考えて、話し合い中からパネルを制作することで、自分の思いやそれを実現する方法、工夫と改善に向けた評価の大切さまで深く議論することができることがわかった。また、一連の共同作業を通じて、立場の違いや自分とは違う視点・思いに触れることができた。本プログラムは、園館内でのサイン計画の際に活用できるほか、来園者を対象としたプログラムのひとつとしても活用できると考える。

まとめ～教育事業推進～

今回のWSは一般市民対象のプログラムを、園館関係者向けにアレンジしたものであるため、このプログラムの他園館への普及という面では弱かったが、総合的な学習の時間や学芸員実習など、長い時間をかけて一つのプログラムに取り組める場での良い手法であることが確認できた。長い時間をかけて取り組むことで、様々な解説パネルの調査や、市場調査、来園者の意識調査など多くのアクティビテ

ィを盛り込むことができるだろう。

記録

開催協力

大阪市天王寺動植物園事務所
松本朱実（動物教材研究所 pocket）
尾崎公子（堺女子短期大学）
おんなの目で大阪の街を創る会
小笠原あや（自然教育研究センター）

検討委員

山本茂行（富山市ファミリーパーク）
松田征也（滋賀県立琵琶湖博物館）
松井桐人（横浜市立よこはま動物園）
小林毅（自然教育研究センター）

記録撮影

赤見朋晃（ズー サポート ネット）

配布資料

スケジュール
参加者名簿
スタッフ紹介
作業にあたって
ワークシート
アンケート

取材

読売新聞
産経新聞
毎日新聞
大阪日々新聞
朝日新聞
共同通信



利用状況の分析と反省



作成したパネルの発表



利用状況などの評価・反省も発表



活発な議論がなされた